

作品を折り上げるかけがえのない喜びを伝えたい――

日本折り紙協会講師として、「東海道金谷宿大学」や「しまだ楽習センター」などで講師を務めてきた西澤さん。現在は、後継者育成に精力的に取り組んでいます。

【折り紙との出会い】

「子どもの頃から、手先を使うことが好きで、紙を切ったり折ったりして遊んでいましたね」と振り返る西澤さん。成人し、小学校の教員になってからも、児童に折り紙の楽しさを教えていたそうです。

「創作活動に本格的に打ち込み始めたのは、退職する少し前。旧金谷町中央公民館で、子どもたちに教えるようになってからでした。一枚の紙がどんどん変身して、いろいろなものになっていく面白さ。こんなに楽しいものを独り占めするのはもったいない」と思ったんです」



【紙ニケーション】
講師として、障害者福祉施設など

にも足しげく通ったことで、貴重な経験を積めたのだと西澤さんは信じています。

「障害を持つなどして、学ぶことが難しい人に教えることは、とても自分の勉強になるんですよ。どんな相手にな

との出会いも増えていると語ります。

「仲間内ではよく『紙ニケーション』と呼ぶのですが、折り紙をしている仲間や、作品を見て興味を持ってくれた人とのつながりは、かけがえのな



創作の喜びを伝え続ける折り紙講師
にしざわみちよ
西澤通予さん（金谷栄町）

も分かるよう伝えるのは、講師の原点だと思っんです。受講した人が、作品を折り上げてうれしそうな顔を見せてくれると、とてもやりがいを感じますね」

「折る紙を教えることで、人いものです。退職してからの方が、人脈が広がりましたね。共感してくれる人が増えていくことが、活動を続ける励みになっています。紙ニケーションの輪を、多くの人につないでいきたいですね」

【病を乗り越えて】

去年の11月に病気のため、左腕を切断する手術を受けた西澤さん。一度は折り紙を諦めかけたものの、今は後継者に自分の培った技術や知識を伝えるため、講座の裏方を務めています。

「手術直後は、もう折り紙を続けられないと考えていました。でもリハビリで『サンタクローズ』を折ったとき、片手でもできることに気が付き、『まだ使える手が一本あるんだ』とあって、気持ちが変わりました」

ただ作品を作る楽しさだけでなく、後進には裏方の楽しみ方も知って欲しいといひます。「教材選びや紙選びは、自分の楽しみになっていきます。紙の色や紙質で出来る作品が全然違ってくるんですよ。細かな面白さを伝えられたらうれしいです」

教室での立場は変わっても、教えることへの情熱を失っていない西澤さん。その表情は、これからも折り紙を通じて、多くの人の喜びを創り出していききたいという意欲に満ちあふれています。



「東海道金谷宿大学」の成果発表会では、指導した学生たちの色鮮やかな作品が並ぶ

Shimadajin File #67

